C-5

XX 構文の多義構造：名詞の場合

小田希望（就実大学）　onozomi@shujitsu.ac.jp

要旨

‘I’ll make the tuna salad, and you make the salad-salad.’の salad-salad は、グリーンサラダのような典型的なサラダを意味する。英語では、このような繰り返し表現は複数の品詞で広く観察され、単語の意味を単に足し算しても解釈できない、一定の形式と意味がセットである構文と考えられるため、本論では XX 構文と呼ぶ。XX 構文に複数の意味があることを認める先行研究においても、構文としての多義を認め、その多義構造を明らかにしようとするものは見られない。そこで本論は、まず使用頻度が最も高い名詞の XX 構文に分析を限定し、XX 構文がもつ複数の意味は、シネクドキに基づいて多義構造を形成することを明らかにする。

1. はじめに

(1)の salad-salad は、ツナサラダなどではなく、グリーンサラダのような典型的なサラダを意味する。すぐ次節でみるが、英語では、このような同じ語句を繰り返す表現は名詞に限らず複数の品詞で観察される。さらに、この種の繰り返し表現が表す意味は、単語の意味を単に足し算しても解釈できないため、一定の形式と意味がセットである構文と考えられる。したがって、本論では XX 構文と呼ぶことにする [1]。

(1) ‘I’ll make the tuna salad, and you make the salad-salad[2].’ (Ghomeshi *et al*. 2004: 308)

XX 構文は、話しことばを使用の中心とし、Hohenhaus (2004)によると、おおよそ 1990 年代以降に見られるようになったとされる比較的新しい言語現象である。

おもに 3 方向からの研究が見受けられる。統語論的観点から compound か否かに焦点を絞るもの(Ghomeshi *et al*. 2004, Bross and Fraser 2020)、語用論的観点から意味決定要因や解釈プロセスに主眼を置くもの(Horn 1993, 2006, Blakemore 2011, Rossi 2011, Huang 2015)、そして、意味論的観点から XX 構文が表す意味がどのように生じるのか、どのような意味関係かを論じるもの(Lee 2007, Song and Lee 2011, Benjamin 2018)である。

しかし、XX 構文に複数の意味があることを認める先行研究においても、構文としての多義を認め、その多義構造を明らかにしようとするものは見られない。そこで本発表では、まず使用頻度が最も高い名詞の XX 構文に限定し、XX 構文がもつ複数の意味がどのような多義構造を形成するのかを明らかにしたい。まず、続く 2 節で XX 構文の統語的・意味的特性を確認し、3 節で名詞の XX 構文がもつ多義構造を考察する。

2. XX 構文の特性

まず、これまでの先行研究で明らかにされている XX 構文の統語的特性を簡単に整理する（2.1 節）。そのうえで、XX 構文の意味を考察しよう（2.2 節）。

2.1 XX 構文の統語的特性

まず XX 構文の統語的特性として挙げられるのは、(2)に示すように、名詞に限らず、動詞・形容詞・副詞・固有名詞・代名詞・動詞句など広範囲の品詞での使用である(Ghomeshi *et al*. 2004, Hohenhaus 2004, Huang 2015)。

(2) a. I'll make the tuna salad, and you make the salad-salad.

b. Like-'em- like-'em? Or, I'd-like-to-get-store-credit-for-that-amount like-'em?

c. Is he French or French-French?

d. I'm up, I'm just not up-up.

e. That's not Auckland-Auckland, is it?

f. My car isn't mine-mine; it's my parents'.

g. Oh, we're not living-together-living-together. (Ghomeshi *et al*. 2004: 308)

広範囲の品詞で使用可能な XX 構文だが、Benjamin (2018: 24-25)は Ghomeshi *et al*. (2004)が作成したコーパスをもとに XX 構文の品詞別トークン頻度・タイプ頻度を明らかにする（図 1）。トークン頻度（41.37%）、タイプ頻度（43.64%）とともに、名詞の使用頻度が最も高い。また、Hohenhaus (2004: 302, 312) も British National Corpus (BNC)などの複数のコーパスをもとに調査し、同趣旨の結果を述べる。

品詞	Token	%	Type	%
形容詞	80	21.92	56	23.73
名前	17	4.66	17	7.20
名詞	151	41.37	103	43.64
代名詞	11	3.01	2	0.85
動詞	76	20.82	40	16.95
その他	30	8.22	18	7.63
合計	365		236	

図 1　XX 構文の品詞ごとのトークン頻度・タイプ頻度　（Benjamin 2018: 24-25 一部改変）

さらに、(3a)のように XX 構文は機能語では作れず、内容語のみを対象とする。また、(3b)のように XX 構文の前に形容詞を置いて修飾することもできない。ただし、(3c)のように real で修飾することは可能である。

(3) a. *Are you sick, or are-are you sick?

b. I want a (*black/ free/ hot) coffee-coffee.

c. Paul is a real man-man. (Bross & Fraser 2020: 2, 6)

なお、Ghomeshi *et al*. (2004: 322)は、(4)のような例を挙げて"Basically, CR [XX construction] can copy less than a word by leaving out inflectional suffixes and copying only the stem."と指摘する。

(4) a. Not vans like ours [i.e., minivans], but van-vans.

b. In fact I barely talked to him. Not talk-talked. (Ghomeshi *et al*. 2004: 322)

つまり、(4)の van-vans のような屈折接尾辞を落とした形も XX 構文に含まれることに注意してほしい。

2.2　XX 構文の意味的特性

次に、XX 構文の意味に焦点を絞ろう。ほとんどの研究者で共通する XX 構文が表す意味が、次の Ghomeshi *et al*. (2004)に代表されるような典型事例に関するものである(cf. Horn 1993, Hohenhaus 2004, Huang 2015)。Ghomeshi *et al*. (2004: 308)は、XX 構文を“For a first approximation, we characterize this effect as denoting the prototypical instance of the reduplicated lexical expression.”（下線筆者）と説明する。

これに対して、Horn (2006)は、典型事例を表す意味を含めて、XX 構文は次の 3 つの意味をもつと論じる。

(5)　a. singling out prototype category members (esp. with nouns)
　　b. assigning a value-added or intensifying use (esp. with adjectives)
　　c. picking up a literal, as opposed to figurative, use　(Horn 2006: 16)

以下、Horn (2006)に基づき、XX 構文が表す prototypical meaning, value-added meaning, literal meaning の 3 つの意味を具体例とともに確認しよう。

(6)　a. I had a job-job once.　(Ghomeshi *et al*. 2004: 312)
　　b. No, what I wanted was a drink-drink.　(Horn 1993: 48)
　　c. [Dialogue between a married couple, recently separated and now living apart.]
　　A: Maybe you'd like to come in and have some coffee?
　　B: Yeah, I'd like that.
　　A: Just coffee-coffee, no double meanings.　(Ghomeshi *et al*. 2004: 315)

(1)や(6a)の XX 構文は、prototypical meaning を表す。(6a)の job-job は（たとえば研究職やアルバイトではなく）典型的な 9 時 5 時の仕事を意味する。prototypical meaning の XX 構文は‘a “real”, “true”, or “echt” X’ (Horn 2018b: 242)、あるいは‘an XX is a proper/ prototypical X’ (Hohenhaus 2004: 301)の意味を表すとされる。

それに対して、(6b)の drink-drink は、たとえばペプシのような典型的な飲料ではなく社会的な際立ちをもつ(socially salient)アルコール飲料を意味する。Horn (2006: 15)は value-added meaning の XX 構文は婉曲表現のようなもの(quasi-euphemism)として働くと述べる。(5)では value-added meaning はとくに形容詞によくあるものとされるが、(6)のように名詞の XX 構文にこの意味が見られないわけではない。

3 つ目の literal meaning の例には、(6c)が挙げられる。(6c)の coffee-coffee は、部屋に誘う口実としてではなく、純粋にコーヒーを意味する。literal meaning は比喩的な意味ではなく、X の典型事例でもない、文字通りの意味を表すとされる。

Horn (2006)が XX 構文の意味を語用論的観点から捉えるのに対して、Song & Lee (2011)は分析対象を名詞に限定したうえで、XX 構文の意味をカテゴリーの観点から捉えようと試みる。Song & Lee (2011)は、XX 構文が表すのは(7)に挙げる異なる 3 つのレベルのカテゴリーだと論じる。

(7)　a. the prototype of a category
　　b. subcategories in a category
　　c. a category itself　(Song & Lee 2011: 445)

Song & Lee (2011)の 3 つのカテゴリーは、Horn (2006)が主張する 3 つの意味と相いれないわけではない。(7a)は、(5a)の prototypical meaning に問題なく一致する。salad-salad はサラダというカテゴリーのプロトタイプのグリーンサラダであり、job-job も仕事というカテゴリーのプロトタイプの職業を表す。

また、(7b)は value-added meaning をカテゴリーX に属すメンバー（サブカテゴリー）であると考えれば、矛盾なく同一視できるだろう。たとえば、(6b)の drink-drink は、アルコール飲料を意味するが、アルコール飲料は「飲み物」というカテゴリーの一種、つまり、飲み物のサブカテゴリーである。言い換えると、「飲み物」が上位カテゴリーで、「アルコール飲料」はその下位カテゴリーという関係である。

さらに、literal meaning を表す(6c)の coffee-coffee をカテゴリーの観点から捉えれば、カフェラテかホットかブラックかなどの種類を問題としないコーヒー全般を意味すると解釈することができる。つまり、コーヒーというカテゴリー自体を意味するので、(7c)の literal meaning と一致すると捉えて問題ないだろう。

ここで、Horn (2006)の主張する 3 つの意味のうち、(5b)の assigning a value-added or intensifying use (esp. with adjectives)について触れておきたい。Horn (2006)は value-added use と intensifying use をひとつの意味と考えるようだが、(5b)をふたつに分けて捉える研究者も見られる。

たとえば、Ghomeshi *et al*. (2004: 314)は“Lawrence Horn (p.c.), in more recent work on CR (which he now calls ‘lexical cloning’), categorizes the semantics of this construction into four types: (a) prototype meaning (which we have already discussed), (b) literal meaning, (c) intensified meaning, and (d) ‘value-added’ meaning.”と述べる。また、Benjamin (2018: 10)も“Horn (2006) offers three interpretations in addition to *prototype*: value-added, literal, and intensified.”として、value-added と intensifying meaning を別個の意味と捉えると理解される。

Ghomeshi *et al*. (2004)と Benjamin (2018)はともにふたつの意味を分ける理由を述べていないので分からないが、本論も value-added meaning と intensifying meaning を分けるべきだという立場を取る。XX 構文のように同じ言葉を繰り返す表現に図像性(iconicity)が関わることは間違いないだろう。典型的な形容詞は段階的(gradable)であり、もともと意味の強弱を示しやすい(cf. Radden & Dirven 2007: 150, Benjamin 2018: 32)。形容詞の XX 構文では、量の図像性が働いて形容詞の意味の程度が強調されやすいのだと考えられる。しかし、名詞はモノであり、1970 年代の Rosch による一連のプロトタイプ研究からも分かるようにカテゴリーのプロトタイプ効果が他の品詞に比べて際立って認識されやすい。名詞の XX 構文で繰り返しによって図像性が関与し強調するのは、名詞の意味の程度ではなく、名詞の特性である典型性(prototypicality)だと考えられる。

したがって、名詞を繰り返すことで intensifying meaning を表すことはないと考えられるため、本論では、少なくとも名詞の XX 構文は prototypical meaning, value-added meaning, literal meaning の 3 つの意味を表すものとして、次節から XX 構文の多義構造を考えていきたい。

3. XX 構文の多義構造

ではここから、XX 構文が表す 3 つの意味がどのような多義構造を形成するのかを考察しよう。語の多義構造を考える際に、メタファー・メトニミー・シネクドキが意義展開を捉えるのに有効なことは、多くの研究で実証されている（瀬戸・編 2007、野村 2014）。このメタファー・メトニミー・シネクドキの概念は構文の多義(constructional polysemy)にも有効だと考えられる（瀬戸ほか 2017 第 5 章 2 節）。結論から言うと、名詞の XX 構文はシネクドキに基づいて多義構造を成すというのが本論の主張である。

シネクドキとは、意味カテゴリーの上下関係（包摂関係）に基づく意味現象である。たとえば、花見の「花」は「桜」を意味するが、これは上位カテゴリー（類）の「花」によって、花の下位カテゴリー（種）に属する「桜」を表す。別の言い方をすると、シネクドキは類と種の関係に基づく。シネクドキには「類で種」と「種

で類」を表す 2 パタンが存在する（瀬戸・編 2007）。花見の「花」は「類で種」を、商品名の aspirin で鎮痛剤全般を表すシネクドキは「種で類」を表す。

まず、XX 構文の中心義を考えよう。3 つの意味の中で prototypical meaning が中心義と考えられる。どの先行研究においても XX 構文が表す意味に必ず prototypical meaning が挙げられることからも、この意義がデフォルトで言語使用者に認知・想起されやすく、使用頻度も高い[3]（cf. 瀬戸・編 2007）。(8)のように、XX 構文の prototypical meaning は名詞 X が表すそのカテゴリーの典型事例を意味する。

(8) a. I'll make the tuna salad, and you make the salad-salad. (=(1))

b. Ziva: Any of you notice something different about Ducky?

McGee: Yeah, he has seemed awfully chipper as of late.

Dinozzo: Ducky does seem plucky. No one loves rain in DC.

ZIVA: No. His ties. He's been wearing tie-ties, not his bow ties. (*NCIS* 7x17)

(8a)の salad-salad はサラダというカテゴリーの典型例だと思われるグリーンサラダを意味する。(8b)の tie-ties も蝶ネクタイではなく、多くの男性が通常身につける典型的なネクタイを意味する。

次に、XX 構文は prototypical meaning を表す中心義から literal meaning へとシネクドキによって拡張すると考えられる。2.2 節で(5c)の literal meaning はカテゴリー自体、つまりカテゴリー全体を意味することを確認した。中心義から literal meaning への拡張は、カテゴリーX の一種である典型事例でカテゴリーX 全体を意味するため、「種で類」を表すシネクドキによるものと考えられる。(9)を見よう。

(9) a. just coffee-coffee, no double meaning (=(6c))

b. Tony: He used his girlfriend's hands to kill me.

Ned: I don't know what to do with that.

Tony: His girlfriend's a doll -- not like you're a doll. She's a doll-doll, like life-sized and plastic.

(*Pushing Daisies* 1x08)

(9a)はコーヒーの種類を問わないコーヒー全般を意味した。(9b)では、Tony は友人の彼女というのは、生きた人間の（人形のように）かわいい女の子ではなく、そのものずばりの人形だと述べる。この doll-doll も人形というカテゴリー自体を表すと捉えられる。

(9a)で考えよう。コーヒーの典型事例は、おそらくキャラメルマキアートやカプチーノではなく、ホットコーヒーなのではないだろうか。(9a)の coffee-coffee が意味するコーヒー全般、つまりコーヒーというカテゴリー自体(literal meaning)と、ホットコーヒー(prototypical meaning)の関係は、カテゴリーとそのサブカテゴリーの関係、カテゴリーの上下関係にある。したがって、種で類を表すシネクドキが関わると捉えられる。

さらに、XX 構文の意味は literal meaning から value-added meaning に展開する。2.2 節において、value-added meaning はカテゴリーX に属する特定のメンバー（サブカテゴリー）であることを指摘した。他方、literal meaning はカテゴリーX 全体を表す。つまり、XX 構文の value-added meaning は、上位カテゴリーの literal meaning からサブカテゴリーを表す意味へとカテゴリーが縮小した（意味が特殊化した）ものと考えられるだろう。このような literal meaning から value-added meaning への意味展開は、カテゴリーX でそのサブカテゴリーを表すため、「類で種」を表すシネクドキが関わると考えられる。(10)を見よう。

(10) a. No, what I wanted was a drink-drink. (=6b))

b. Kensi: I look the part?

Deeks: Absolutely. You look the...(clears throat) You look the part.

Kensi: Is that supposed to be a compliment or an insult?

Deeks: As a professional--I mean a pro...Not, not a pro-pro. I just meant like as..as an agent...I'm gonna stop talking. (*NCIS LA* 4x8)

(10a)はペプシのような典型的な飲料ではなく社会的な際立ちをもつアルコール飲料を意味する。(10b)では、潜入捜査官として売春婦に扮した相棒に対して、Deeks が pro-pro を使用する。この文脈では、pro-pro は婉曲的に売春婦(professional prostitute)を意味すると解釈される。

(10b)を例に考える。professional というカテゴリーは、ある特定の高い技術や能力をもつ人の集合と言えるだろう。そのカテゴリーには、サブカテゴリーとしてスポーツ選手や様々な専門職の人が含まれる。(10b)の pro-pro が表す売春婦も一種の専門職に就く人と考えられるため、professional のサブカテゴリーを成す。value-added meaning は婉曲表現のように働くという Horn (2006)の指摘を思い出してほしい。特殊化した意味の pro-pro によって、売春婦を明示する表現を避けて婉曲的に表す。カテゴリー全体(literal meaning)と特殊化した意味のサブカテゴリー(value-added meaning)の関係は、類と種の関係にある。したがって、literal meaning から value-added meaning への意義展開には「類で種」を表すシネクドキが関与すると考えられる。

最後に、XX 構文の多義構造を(11)にまとめる。

(11) 名詞の XX 構文の多義構造

1. prototypical meaning 【中心義】

↳ 2. literal meaning 【シネクドキ（種で類） ＜1】

↳ 3. value-added meaning 【シネクドキ（類で種） ＜2】

名詞の XX 構文は、典型事例の意味を表す中心義 prototypical meaning から、シネクドキによってカテゴリー全体を表す literal meaning に展開し、そこからさらに意味が特殊化される value-added meaning へと広がる。

4. 結論・今後の発展

以上、名詞に限定して XX 構文の多義構造を分析した。名詞の XX 構文は prototypical meaning を中心にシネクドキを拡張原理として literal meaning へ、そこからさらに value-added meaning へと構文の多義ネットワークが形成されると論じた。

本論は名詞の XX 構文のみを扱ったが、2 節でも触れたように、XX 構文は名詞に限らず、形容詞、動詞など他の品詞でも使用される。今後、名詞の XX 構文を接点として、形容詞、動詞など他の品詞の XX 構文がどのように多義構造を展開するのかを明らかにして、XX 構文の全体像を捉えたい。

注

1. 名称は様々である。Horn (1993)は the Double construction、Ghomeshi *et al*. (2004), Song and Lee (2011), Widlitzki (2016)は Contrastive (Focus) Reduplication (CR)、Horn (2006, 2018a, 2018b), Huang (2009, 2015)は the Lexical Clone/ Lexical Cloning、Hohenhaus (2004, 2007), Benjamin (2018)は Identical Constituent Compounding (ICC)、Taylor (2003)は reduplication、Rossi (2011)は Lexical Reduplication、時政(2017)は XX 構文と呼ぶ。
2. XX 構文の表記方法も定まったものがない。本稿では全て salad-salad のように noun-noun の形に統一する。
3. また、prototypical meaning が名詞以外の品詞の XX 構文へ意義展開する際の接点となると考えられる。

参照文献

Benjamin, Brandon Lee (2018) Identical Constituent Compounding: A Conceptual Integration-Based Model. M.A. thesis, Case Western Reserve University./ Blakemore, Diane (2011) On the descriptive ineffability of expressive meaning. *Journal of Pragmatics*, 43(14): 3537-3550./ Bross, Fabian and Katherine Fraser (2020) Contrastive focus reduplication and the modification puzzle. *Glossa: A Journal of General Linguistics*, 5(1): 1-18./ Ghomeshi, Jila, Ray Jackendoff, Nicole Rosen, and Kevin Russell (2004) Contrastive focus reduplication in English (The Salad-Salad Paper). *Natural Language and Linguistic Theory*, 22: 307-357./ Hohenhaus, Peter (2004) Identical constituent compounding – a corpus-based study. *Folia Linguistica*, XXXVIII (3-4): 297-331./ Hohenhaus, Peter (2007) How to do (even more) things with nonce words (other than naming). In Judith Munat (ed.), *Lexical Creativity, Texts and Contexts*, 15-38. Amsterdam: John Benjamins./ Horn, Laurence R. (1993) Economy and redundancy in a dualistic model of natural language. In S. Shore and M. Vilkuna (eds.), *SKY 1993: Yearbook of the Linguistic Association of Finland*, 33-72. Helsinki./ Horn, Laurence R. (2006) Speaker and hearer in neo-Gricean pragmatics. *Journal of Foreign Languages*, 164: 2-26./ Horn, Laurence R. (2018a) Words in edgewise. *Annual Reviews of Linguistics*, 4: 1-19./ Horn, Laurence R. (2018b) The lexical clone: Pragmatics, prototypes, productivity. In Rita Finkbeiner and Ulrike Freywald (eds.), *Exact Repetition in Grammar and Discourse*, 234-264. Berlin, Boston: Mouton de Gruyter./ Huang, Yan (2009) Neo-Gricean pragmatics and the lexicon. *International Review of Pragmatics*, 1: 118-153./ Huang, Yan (2015) Lexical cloning in English: A neo-Gricean lexical pragmatic analysis. *Journal of Pragmatics*, 86: 80-85./ Lee, Binna (2007) A focus account of contrastive reduplication: Prototypicality and contrastivity. *SNU Working Papers in English Linguistics and Language*, 6: 78-90./ 野村(2014)『ファンダメンタル認知言語学』東京：ひつじ書房./ 小田希望 (2017)「XX 構文の語用論的機能」『就実英学論集』34: 19-40./ Radden, Günter and René Dirven (2007) *Cognitive English Grammar*. Amsterdam: John Benjamins./ Rossi, Daniela (2011) Lexical reduplication and affective contents: A pragmatic and experimental perspective. *Belgian Journal of Linguistics*, 25: 148-175./ 瀬戸賢一（編）(2007)『英語多義ネットワーク辞典』東京：小学館./ 瀬戸賢一・山添秀剛・小田希望（共著）(2017)『解いて学ぶ　認知構文論』東京: 大修館書店./ Song, Myounghyoun and Chungmin Lee (2011) CF-reduplication in English: Dynamic prototypes and contrastive focus effects. *Proceedings of SALT*, 21: 444-462./ Taylor, John R. (2003) *Linguistic Categorization*, 3rd edn. Oxford: Oxford University Press./ 時政須美子 (2017)「英語の XX 構文とアドホック概念」『人間文化研究科年報』（奈良女子大学大学院人間文化研究科）32: 23-33./ Widlitzki, Bianca (2016) Talk talk, not just small talk: Exploring English contrastive focus reduplication with the help of corpora. *ICAME Journal*, 40: 119-142.